

令和6年度 第1回周南市総合教育会議 会議録

- 1 日 時 令和6年9月27日（金）
開会：13時30分 閉会：15時00分
- 2 場 所 周南市岐山通1丁目1番地 周南市役所 庁議室
- 3 出席委員 藤井律子市長 厚東和彦教育長 松田福美委員
片山研治委員 岡寺政幸委員 吉本妙子委員
- 4 事務局 教育部長 教育部次長（教育政策課長） 生涯学習課長
人権教育課長 学校教育課長 学校給食課長
中央図書館長
- 5 書 記 教育政策課（課長補佐 教育政策担当係長）
- 6 協議事項 以下の通り要約して記載

（1） 協議内容の説明

発言者	発言内容
事務局	本日の議題は、第3期教育大綱の策定について。 本年度、令和7年度から令和11年度を対象とする第3期教育大綱の策定をする。 昨年10月の総合教育会議では、市長、教育長、教育委員の「教育に対する考え方、思い、気付き」等について意見交換をさせていただいた。 今年3月の総合教育会議では、「子どもたちを取り巻く教育環境について」、いろいろな角度からご意見をいただいた。 その時のご意見も踏まえながら、本日は次期大綱の基本理念や基本方針の事務局案をお示ししているので、改めてご意見を伺いたい。

（2） 協議内容

市長	この教育大綱は、今後5年間の教育の方向性を定める羅針盤となる重要なもの。 数日前に事務局から説明を受けた時、今日は教育大綱の基本理念と基本方針を決定することが目標と聞いたが、決定までできるかは別としてしっかり意見交換をしたい。 教育委員さんも色々と御意見をお持ちであると伺ったが、教育大綱の策定責任者である私から考えを述べさせていただきたい。 まずはまちづくり総合計画の内容を共有したい。
----	--

	教育大綱は、まちづくり総合計画の個別計画の一つとして位置づけられるが、一方、こどもを取り巻く環境という観点からは、まちづくり総合計画と同等のレベルで考えるべきであり、教育は独立した分野でありながら、まちづくり全体の一部でもあると認識している。 総合計画には現在の社会情勢で大きなものはこのようなことがあるということで、危機的な人口減少・少子高齢化、加速するカーボンニュートラルに向けた取組、急進展するデジタルが支える社会、多様性を増す価値観やライフスタイル、高まる防災減災意識、注目される SDGs の次、流動化する国際情勢と社会・経済情勢について記載した。 こどもにはその全てが関係してくる。 他に市民アンケートを実施したが、人口減少社会において、これからの 5 年間、ひいては 2050 年に向けたパスにたどり着くために、周南市としてどのような教育をしていかなければならないのか考えなければならない。 まちづくり総合計画の基本理念は「将来世代へ 責任あるまちづくり」に決定し、「現世代と将来世代の幸せを慮る市政の信念を「責任」という言葉に置き換え、これからのまちづくりの指針とします。」という文言を入れた。 私はよく、「まちは生きている」と発言しているが、将来像を定めて、現世代と将来のこどもたちにどのようにしてまちを繋げていくか、その理想を書き出した。 この基本理念に沿って、現世代と将来世代の幸せを両立させることを目指す。 総合計画の体系図を見ていただくと分かるように、構成は強みを活かす進化戦略と、市民生活を支えるものを二つの柱とした。 教育はこの中の色々なところに広がっている。 基本計画の中に分野別計画があり、現在の教育大綱の基本理念は、この分野別計画の 2－2 教育の充実の中の目指す姿に出てくるものとほとんど同じであり、教育において最上位計画となる教育大綱の理念が、分野別計画の言葉と同じでいいのだろうか悩んでいる。
片山委員	改めて「ふるさと周南に愛着をもち 力強く未来を生き抜くこどもを育む 周南の教育」という理念案の「愛着をもち」というところについて考えたが、これは教育において色々なことをやったうえで、結果としてこどもたちが愛着をもつということであって、理念にうたうには違和感があ

	る。 教育の理念として掲げるのであれば、力強く未来を生き抜くこどもを育むという部分はふさわしいのではないかと思う。
松田委員	第２期教育大綱にあった「子どもの夢に寄り添い」という理念が、第３期教育大綱から言葉が削除されていたことに対して疑念を感じている。 私たちは、どのようにこどもを育てたいのか、教育が到達すべき理想を教育大綱の柱に掲げる必要がある。 先程市長が説明された、市としての未来像に対して、総合計画と根底や方策は繋がるが、教育として追及すべき理想の姿について、議論を深める必要性を感じている こどもに寄り添うということは、根底に「こども」という存在をあるがままに認めていこう、そして認めたものを一つ一つ大事にしようという思いがある。 一人一人その人の良さがあって、その良さは他人と比べるものではなく、一つずつ大事に育てていく、これが教育の神髄であり、可能かどうかは別として、こどもたちを一律に考えるものでもなく、それぞれを比べるものでもないということを理想として、教育をやってきた。 第２期教育大綱では、そのような考え方で育てられたこどもたちの未来は、多様な世界の中で必要なことは「生きる」ではなく「生き抜く」ということではないかとなり、「生き抜く」という言葉についても議論を重ねて理念を決めて、５年間取り組んできた。 しかし、これだけ大きな教育の神髄に至るものに対して、たった何年かで成果が出てくるとは思えない。 このことについてもっと共通理解を深めていくことが、こども一人一人を大事にする教育に繋がるのではないか。 こどもまんなか宣言には、様々な学びや遊び、体験を通して生き抜く力を育むと記載してあるが、それを、学びの中で本当に実現できているか、どちらかという十把一絡げになっていないか、仕方ないで片付けていないか、と改めて考えた。 この場で話すことはとても重要で、教育大綱の理念とはどんなものなのか、出来るかどうかではなく、目指さなければならない理想の姿を、こどもたちにとってどうなのかを見据えて示さなければならない。

岡寺委員	今回出した案に至るまでに、いろいろな意見を交わしたが、その前提として第２期教育大綱の基本理念も見ており、各委員から出されたアイデアと言葉を組み合わせたりして、協議を重ねてきたので、今の正直な心境として、市長からの投げかけについて、どうすればいいのだろうと迷っている。 PTA や学校運営協議会でこどもたちを育ててきた経験から、教育の理想は一言では言い表せないほど多面的で奥深いものだと感じている。 教育大綱の対象はこどもだけではない。 例えば「ふるさと教育」ついていろいろな人に色々とお世話になったということを思い返すと、「ふるさと」には深い意味があるなと実感している。 私はこどもたちに「よく考えなさい」「言われたとおりにやってはいけないよ」と教えているが、そこには「生き抜く」という意味が入っている気がする。 シンプルな言葉でも、深みを与えることはできるので、理念にはあまり色々な言葉を入れなくても、短い言葉で表現してもいいと思う。
市長	「しっかり考えることができるこどもになって欲しい」というメッセージをこの理念に込めたいという意味でよろしいか。
岡寺委員	そのとおり。
吉本委員	市長から説明のあったまちづくり総合計画の流れについては、ものすごく共感できた。 理念とは理想の姿であって、皆に浸透していかなければ意味がない。岡寺委員の話借りると、簡単に口ずさめるような、すぐに言葉に出しやすく、教育の目指す姿を明確に表せる言葉が良い。 第２期教育大綱の基本理念の言葉を気に入っており、最初に第３期の案を見たときはとても違和感があった。 「子どもの夢に寄り添い」が、正にこどもまんなかであるということと、「生き抜く力」というのは生きるだけではなく、本当にたくさんのことがある中を生き抜くための力はとても大切なことだと思っている。 理念案の「ふるさと周南に愛着をもち」というのは少々押し付けがましい感じがする。 ふるさとに愛着をもつというのは、本人次第であり、まさしくそれがこどもの主体性であり、主体性を持つというこ

	とは、自分で考え抜いてそれを行動に移せるかどうかだと思う。 それに対して魅力あるまちづくり、帰りたくなるまちづくり、住み続けたいくなるまちをつくるのが市民全体の責任である。 「誰一人取り残さない」とは、誰でも認められる、大人になるにはどのような道もあるということを教え、「自立」には自分で全てができるということだけではなく、自分の言葉で助けを求めることも含まれる。 よって、第２期教育大綱の「子どもの夢に寄り添い生き抜く力を育む」という言葉はそのまま残して欲しい。
松田委員	教育で一番に言われるのが人格形成ということで、一人一人を育てるのが義務教育の役目だということをずっと言われてきた中で、こどもの存在を「今のままで良い」「あなたには良いところがある」と認めていかなければならないということを強く思う。 今は自己肯定感が低い、そして自己の存在を認める場も少ない、どちらかというとな画的なことが要求される中で疲弊してしまっているこどもがたくさんいる。 不登校傾向や、自分をうまく出し切らないで荒れてしまう、どちらかという手がかるという風に思われてしまっているこどもにもその子の良さは必ずあるので、それに気づかせて、自分の良さとしてしっかり出せるように育てていく、それが一人一人を育て、人格形成に繋がっていく。 いろんな場所で保護者や地域の人にもこの話をしながら、例えば大人しい子には「積極性がない」とは言わないこと、逆に大人しいことの良さがある、そのような多様な価値が認められる社会を作らなければならない。 一人一人を大切に育てることについて希望を持って語れる言葉が、「子どもの夢に寄り添い」ではないかと思っている。 こどもたちが夢を持つか持たないかではなくて、人の中には必ず良さがあるので、それを何とか活かしたいとか、認められたいという思いが、将来の夢になっていくのではないかな。 この「子どもの夢に寄り添い」にはとても深い意味があり、自分の夢に寄り添ってくれる教育がされるということは、すごく温かい環境を作るのではないかなと思うので、この

	言葉は外したくない。 「生き抜く力」は、考え抜くとか、行動に移すとか、自分で選択して自分で決定することで、小さいころから繰り返すということはとても大事なことです。 昔は、こどもたちに任せて、自分で考えなさいと言いながらも、大人の考えに従う、大人の社会に寄り添う形をイメージしがちだったが、今は自分で選択して自分で決定するということを繰り返していくことが、将来的にも求められ、そのような経験をしていくことで、自信をつけたり、失敗を乗り越えたりしていけるのではないかと思います。 「力強く生きる」という言葉には抵抗があり、ただ強い力を意味するわけではないと分かってはいるが、力強くなくても「生き抜く」ということ自体が素晴らしいことではないかと思っている。
吉本委員	多様性など、本当に時代が大きく変化していく中だからこそ、考えは柔軟に変えても良い。 こどもたちは、自ら考え、選択して行動し、その結果を振り返り、改善することで、変化に対応できる力を身につけることができる。
松田委員	今言われた「選択と挑戦を繰り返す」というのはとても良いことだと思う。
教育長	現在進めている部活動の地域移行には、松田委員が言われた選択と挑戦、こどもたちが自ら選択し、主体的に活動する機会を増やすことが含まれている。 市が掲げているパーパスである 2050 年を乗り越えられる周南市になるということを踏まえて考えたときに、今回のまちづくり総合計画で、「将来世代に責任あるまちづくり」と書かれており、その中に、将来世代に引き渡すまちの姿を意識して織り込むとなっている。 その将来世代というのが、2050 年を基準とすると今の小中学生であり、彼らが、今の現役世代が引き継ごうとするまちを受け止められるだけの力を教育の中で作っていくのが大事だと思う。 では、学校教育の中ではどのように育てていけば良いのか、家庭・地域はどうすれば良いのか、周りにいる大人たちはこどもたちにどのように関わっていけばいいのかということを教育大綱の中で整理していくべき。 こどもたちの受け止める力や、受け止めたものをさらに発展させていく力、その力を育む場としての環境整備はど

	うあるべきなのかということを考えながら再構築が必要と 考えている。 その時に、先程から出ている「夢」とか「生き抜く」と いうキーワードは、理念の中に落とし込むというよりは、 基本方針の方に落とし込んで具体的に推進方向を定めてい くということもできるのではないかなと思う。
松田委員	「夢」を基本方針に織り込むということは、部分的なも ので捉えていこうとすることになってしまう。 教育大綱の基本理念には、周南のこどもたちにはこう あって欲しい、という広く大きな思いを掲げなければなら ない。 大きな目標に対して、どの方向から取り組んでいくかと いうのは世代ごとに変えていくことが出来る。 まさに品格があれば、こどもたちは自然とふるさと周南 を誇りに思うはずであり、そのふるさとの部分は、具体的 な取組の一つでいいのではないかな。
教育長	前大綱も今回の案も理念の最後は「周南の教育」という 締めくくりになっており、「こども」だけではなく全ての 市民への教育を指している。 よって、こどもたちへの教育に特化した表現は、基本方 針やより詳細なレベルに落とし込んでも良いのではないかと 考えた。
松田委員	これまでは、学校・地域・家庭のみんなが一つの教育目標 に向かっていけるような取組をするという視点もあまりな かったように思う。
教育長	今回の基本方針は、こどもを取り巻く環境を大きく3つ の柱に分け、それぞれが連携してこどもたちの成長を促す という考えに基づいている。 生涯学習で言えば、大人が学び続ける姿を見せること で、こどもたちの学習意欲を高める環境を作ること。
松田委員	第2期教育大綱までは各方針が分離していたので、行政 の立場から3本のくくりでまとめるというのは大事な視点 だと思う。 教育理念はこどもたちのために大人たちがどのように関 わるべきかという視点が重要。 生き抜く力を育むことは、学校だけでなく、家庭や地域 における教育がないと出来ない。 普段、家庭における子育ての中で選択と挑戦をさせてい るはず。

	学校教育においては、課題解決型の学習や自分でテーマを選んで学習するなど、従来の授業スタイルからの変革が必要。
吉本委員	課題を発見する力も重要だと思う。
松田委員	それぞれの分野の取組の、今の状況で課題を見つければ、そこからふるさと教育に繋がるものは必ず出てくるので、それはやはり取組の中でやっていくものだと思う。
岡寺委員	教育に関わる中で「ふるさと」は大事にしなければならないと思うようになった。 教育理念として掲げる言葉は、自然と意識するようになるので、「ふるさと」という言葉を使った方がいいのではないかとも思う。
松田委員	「ふるさと教育」という言葉は漠然としたイメージを持たれがちかもしれないが、実際には地域との関わりを通して、地域が抱える課題や良さ、風土などを見つける学習である。 「ふるさとは良いところですよ」という教育も必要なのかもしれないが、今の周南市、自分が住んでいる地域を知って、こどもが自分なりの考えを持つ、それを繰り返すことが、こどもたちが社会を広げていく土台になる。
岡寺委員	ふるさと教育はずいぶん前から言われ続けているのか。
松田委員	ふるさと教育はもうずっと前から言われ続けているが、意味合いはだんだんと変化している。
吉本委員	ふるさと教育は単なる地域との触れ合いだけでなく、様々な体験を学びに変えていくことだと想像した。 周南市のような工業地帯では、コンビナート企業も地域の一員であり、こどもたちの教育に積極的に関わることで、将来の可能性を広げることが出来るのではないか。
教育長	近年、ふるさと教育が注目されている背景には、地域の人口減少という深刻な問題がある。 従来、小学生のふるさと教育では、学校の校区を起点に、徐々に地域全体、さらには企業や様々な分野の人々との関わりを広げていくということを行っていた。
吉本委員	今のふるさと教育とは、こどもたちを中心として考え、地域の課題を見つけては周りも巻き込んで、学んでいくということか。
松田委員	ふるさと教育で周南市のことを教えるときは、自然と産業の2つの側面から話をしていた。

	こどもたちの考え方は大人とは異なる斬新さを持っており、市民一人一人の中にこどもたちを取り込んでふるさと教育をしていこうという発想もある。
吉本委員	周南のイメージは新幹線・海・煙突が描かれた図書館にある絵のイメージが強い。
松田委員	単に自然豊かな地域のこどもたちも、学年が進むにつれて周南市は企業のまちで、人の交流も盛んで新しい文化も入って来るところまで学び、自然と産業が繋がっていくという流れで、自分が住んでいる地域について学ぶことは、教育において大事な柱である。
教育長	そのような地域について学ぶ教育を進めることで、大人たちがこどもたちに関わって、自分たちが先々どうしないといけないかということや、シビックプライドの醸成にもつながっていく要素はあると思う。
市長	今のふるさと教育と違い、以前は地域の偉人や歴史的な出来事など、地域の良い面を誇るお国自慢的な、過去の偉大なものを伝えていくというイメージが強かった。 現在のふるさと教育では、周南で言えば水素エネルギーや脱炭素化など、現代社会が抱える問題についても学び、それにどう対処していくかという内容まで教育されているのか。
事務局	中学校では、地域にある資源を教材として活用しながら、今後のまちの未来像も学習の中で扱い、生徒たちが考えるという場面は多い。 小学校も、高学年ではそのあたりのことも意識して学習を組んでいる。
市長	言葉の受け取り方は人それぞれだが、私は、「ふるさと教育」という言葉に対して、地域の良いところを誇る「お国自慢」のようなイメージを持っていた。 だからこそ理念に使う言葉には、誰が見ても同じイメージを持てるような言葉を使うことが重要と思う。
松田委員	学校においては、こどもの状況によって重点的な学びの内容は変わって来るので、それはその学校がある地域の特性を生かすことに繋がる。 例えば「生き抜く力を育む」を目標にした場合、学校や地域で、全部違うかもしれないが、それを大人自身が考えることによって、対応が変わる。

	よって理念には明確に定義が出てくるような言葉はふさわしくなく、逆にいろいろ議論もあるが、根幹を為すような言葉が良いと思う。
吉本委員	理念とは、夢が語れるものとか、理想であるべきで、あまり具体的に絞り込んだ言葉ではなく、抽象的でありながらも、目指すべき頂点は一つに定まっているものが良いと思う。 目標に向けたやり方は人それぞれで変わって来るべきものだと思う。
教育長	「未来をつくる周南の教育」「夢が生まれる周南の教育」といったように、抽象的な言葉で表現することで、人々がそれぞれの解釈を持ってもらうのもいいのではないか。
松田委員	理念の中で、未来を語りながら、今のこどもたちを育てるという両立をさせる表現は難しい。 今言われたことは、未来に向けて今のこどもたちをどう育てるかという発想を理念の中に含めたいが、今のこどもたちにもそう考えて欲しい、という解釈で良いか。
教育長	自分としては、2050年から見て、今のこどもたちをどのように育てれば良いかという考え方が良いと思っている。
市長	その考え方はずっと持たれていたのか。
教育長	AIなどの流行りだしている技術を今のこどもたちに与えていくことによって、2050年の社会にどう引っ張ってこれるかという考え方の方が教育としては良いと思う。
松田委員	AIについては今のこどもたちは既に使っているのではないか。
教育長	使っているこどもは使っているが、皆ではないので、教育で引っ張っていく必要があると思う。
松田委員	全員やらなければならないということか。
教育長	そのとおり。現時点に立って、今のこどもたちを背中から押すという発想よりも、未来に立ってこどもたちを導くという発想がよい。
片山委員	繋げるというのはそういうことだと思う。
市長	事務局からは本日は基本方針まで決定したいと聞いているが、やはり理念が決まらないと方針も決めることは出来ない。
教育長	本方針の構成は、学校と家庭・地域とそれを取巻く大人たちという3本柱のまま変更せずに進めたい。

市長	例えば基本方針①には「未来を主体的に生き抜く」とあるが、主体的でないとしてもそもそも生き抜く力はないということにならないかとも思うので、必要のない言葉は削って欲しい。 前大綱の「生き抜く力」という言葉を決めたときに、その日の夜、保育関係者の集まりに出席したが、そこで「生きる力」を「生き抜く力」に変えました、という話をする と皆さんがすんなりと理解を示してくれ、保育の現場でも使っていますと賛同してもらい、教育は社会全体で関わらなければならないことだと実感した。
松田委員	今回の議論のように、様々な立場の人々が意見を出し合い、互いの考え方を尊重し合うことは、こどもたちの成長にとっても非常に有益である。 学校教育において、今のこどもたちをみて、こう育って欲しいと思い浮かべるイメージは人によってあまりずれるものでもないので、行政も、保護者も、教員も、地域社会もみんなで一つの理念に向かっていくということの大切さを再認識した。 教育大綱は、地域全体の教育の方向性を示す重要な文書であり、その重みを認識する必要がある。 まちづくり総合計画にもあるように、教育にも時代を超えて変わらない普遍的な価値観と、時代に合わせて変化していくべき部分がある。 将来、こどもたちが困らないように、教育を通じてどのような能力を育成していくべきかを明確にしなければならない。
吉本委員	理念を、皆がキーワードと言えるようなものにすれば、施策まで作り込んでいくときにも常に理念に立ち返りながら進めることが出来る。
市長	私達には、少子化が進む中でも、こどもたちを一生懸命育てていくという責務がある。 現在の案は、例えば岐陽中学校が AI 活用のモデル校となっているにも関わらず、教育大綱に AI に関する言及が不足しているところに不安を感じる。 また、教育大綱の理念と方針は、「こどもまんなか宣言」や「まちづくり総合計画」と整合性が取れているべきである。 どのようなこどもを育てたいのかについて、このメンバーで改めて議論してみたい

	周南市は「こどもまんなか宣言」や脱炭素への取組、周南公立大学の活躍など、多くの先進的な強みを持っているまちで、注目もされる。本市の教育大綱も市の品格に見合うものにしたい。
松田委員	何事もすぐに成功させることは難しいので、挑戦と継続という要素は理念に含めたいと思う。 こどもまんなか宣言について、教育現場で今一度再認識する必要が有る。
吉本委員	理念にうたったことを繰り返し振り返り、刷り込んでいくことも大事だと思う。
市長	まちづくり総合計画も理念を先に打ち出して、それに沿って中身を作り上げたので、理念を真っ先に作らなければならない。 まちづくりのキーワードになっている「品格のある」という言葉を最初に使う時もすごく悩んだが、使った結果として色んな事業が「品格のあるまち」を意識して進められており、そのようなキーワードは必要だと思う。

(3) 終わりに

発言者	発言内容
市長	まちづくり総合計画も、理念を先に打ち出して、それに沿って中身を作り上げてきたので、教育大綱も基本理念を真っ先に作らなければならない。 まちづくりのキーワードになっている「品格のある」という言葉を最初に使う時もすごく悩んだが、使った結果として色んな事業が「品格のあるまち」を意識して進められている。 教育においてもそのようなキーワードを理念に掲げたい。